

【書評】

## 藤瀬泰司著『中学校社会科の教育内容の開発と編成に関する研究－開かれた公共性の形成－』

(風間書房, 2013年) 10,000円

西村公孝

(鳴門教育大学)

本書は、藤瀬泰司氏が広島大学に提出した学位論文を補訂し、独立行政法人日本学術振興会の2012(平成24)年度科学研究費補助金(学術図書刊行助成)を得て、公刊したものである。

本書は中学校社会科三分野制の下で子どもに「開かれた公共性」を形成するためには、どのような内容開発研究を行えばよいか、構築主義社会科論を活用し、その妥当性を実証的に検討した良書である。

### 1. 本書の構成と意義

本書の構成は次の目次により論述されている。

#### 序章 本研究の意義と方法

##### 第一節 研究主題

##### 第二節 本研究の意義と特質

##### 第三節 研究方法と論文構成

#### 第一部 開かれた公共性を形成させる中学校社会科教育内容開発の理論と方法

#### 第一章 中学校社会科教育内容開発研究の課題と方法

##### 第一節 中学校社会科教育内容開発研究の課題

##### 第二節 中学校社会科教育内容開発研究の方法

##### 第三節 中学校社会科教育内容開発研究の論理

#### 第二章 構築主義に基づく中学校社会科教育内容開発の方法と実際

##### 第一節 構築主義社会科論という社会科教育論の意義

##### 第二節 構築主義に基づく中学校社会科教育課程編成の方法と実際

##### 第三節 構築主義に基づく中学校社会科授業構成の方法と実際

##### 第四節 構築主義に基づく中学校社会科教育内容開発の論理

#### 第二部 開かれた公共性を形成させる中学校社会科教育内容開発

#### 第三章 構築主義に基づく地理的分野の教育内容

#### 開発

##### 第一節 単元「障害者問題を考える」の授業開発

##### 第二節 単元「国際債務問題を考える」の授業開発

##### 第三節 構築主義社会科論に基づく地理的分野教育内容開発の意義

#### 第四章 構築主義に基づく歴史的分野の教育内容開発

##### 第一節 単元「靖国問題を考える」の授業開発

##### 第二節 単元「アイヌ問題を考える」の授業開発

##### 第三節 構築主義社会科論に基づく歴史的分野教育内容開発の意義

#### 第五章 構築主義に基づく公民的分野の教育内容開発

##### 第一節 単元「性同一性障害問題を考える」の授業開発

##### 第二節 単元「犯罪被害者問題を考える」の授業開発

##### 第三節 構築主義社会科論に基づく公民的分野教育内容開発の意義

#### 終章 開かれた公共性を形成させる中学校社会科教育内容開発の成果と課題

本書の内容を紹介する前に、キーワードの「開かれた公共性」と構築主義社会科の捉えを見ておきたい。氏は「開かれた公共性」とは、目標概念となる「多文化、多民族という社会の異質性を前提に、様々な人々が関心を寄せる公的な事柄、例えば生活規範や社会規範、地理的空間や歴史的記憶について自由に議論させることにより、民主的、平和的な国家・社会の形成者を育成することをめざす概念」と説明している。構築主義という新しい社会科教育論の活用については、経験主義社会科論、教養主義社会科論、科学主義社会科論では、開かれた公共性が形成できないとして、「地理や

歴史や社会の現実が社会的に作られることを子どもに学習させる」構築主義社会科論では、「国家や社会の多数者が構成する地理的空間や歴史的空間や社会的規範の現実を無批判に受容させることなく再構成させることができるため、分野制の教育課程を編成できるとともに子どもに開かれた公共性を形成させることができる」と説明している。

各章の概要を簡単に紹介しておきたい。

第一章では、2つの問いを設定し中学校社会科分野制の下で子どもに開かれた公共性を形成させる観点から、教育内容開発研究の課題を明らかにし、課題解決の方法を示している。

第二章では、3つの問いを設定し構築主義に基づく中学校社会科の教育課程編成と授業構成の方法を具体的に示し、子どもに開かれた公共性を形成させる中学校社会科教育内容開発の方法を明らかにしている。

第三章では、構築主義社会科論に基づく地理的分野の教育内容開発について、3つの問いを設定し身近な環境と世界の空間編成が争点となる障害者問題と国際債務問題の単元開発を行い、その実験授業と学習評価の検証を行っている。

第四章では、構築主義社会科論に基づく歴史的分野の教育内容開発について、3つの問いを設定し太平洋戦争史と北海道開拓史の記憶編成が争点となる靖国問題とアイヌ問題の単元開発を行い、その実験授業と学習評価の検証を行っている。

第五章では、構築主義社会科論に基づく公民的分野の教育内容開発について、3つの問いを設定し性別規範と司法規範の編成が争点となる性同一性障害問題と犯罪被害者問題の単元開発を行い、その実験授業と学習評価の検証を行っている。

終章では、本研究の成果を総括し開かれた公共性を形成させる中学校社会科教育内容開発の成果と課題を提示している。

## 2. 本書の成果と課題

本書の成果については次の3点を指摘できる。

第1は、これまで学習指導要領が目標としてきた「公民的資質」育成は、日本人、日本国民という社会の同質性を前提に国家や社会の多数者が構成する生活規範や社会規範、地理的空間や歴史的記憶の現実を無批判に受容させてきたと批判し、「開かれた公共性」の形成という新しい目標概念を提起し、中学校社会科教育内容開発を3分野で

行ったことである。

第2は、構築主義社会科論という新しい社会科教育論を提起し、その理論に基づく中学校社会科の教育課程と授業構成の方法（表明・探求・議論）を明らかにすることによって、地理や歴史や社会の現実を客観視する国家・社会の傍観者から地理や歴史の現実を構成する国家・社会の形成者育成に社会科教育の教育機能を転換させたことである。

第3は、社会問題学習を公民的分野だけでなく、地理的分野や歴史的分野でも組織する方法を提起し、それぞれの分野で2つの単元を開発し、その実験授業と学習評価により検証を試み、理論と実践の統合を図る開発的実践研究の成果をまとめたことである。

以上の3点の成果に見られるように、社会科教育学研究において立ち遅れていた中学校社会科分野制について、子どもに「開かれた公共性」を形成させる教育内容の開発と編成の課題から、社会科教育実践学の地平を開いた本書の意義は大きい。また、研究全体の構成に論理的かつ一貫性があり、平易な論述が各章で展開され読者を引きつける。ただし、パターン化された論述方法には若干の意見がないわけではない。

最後に、課題にふれ今後の氏の研究発展に期待したい。キーワードの「開かれた公共性」の概念と三分野との関連である。子どもに開かれた公共性を形成するために6つの社会問題学習を開発し価値判断を表明・探求・議論をさせているが、従来の社会認識と地理、歴史で主張する公共性との違いは何か。また氏が指摘する民主主義の形成原理である議論の活用がランキング（判断と話し合い）であり、公共性を開く議論が教師主導で行われ評価問題分析だけでは公共性を開く議論の中身が見えてこない。また三分野の公共性の関連と年間計画にどのように構築主義社会科論を位置付けるか課題であろう。氏が批判した経験主義社会科論は、第二部の教育内容開発では触れられていないのはなぜか、疑問の残るところである。

若干の課題を示したが、これらの課題により本書の価値が低下するものではない。社会科教育を志す多くの実践者と研究者にお薦めできる労作であり、中学校社会科教育内容開発に関心のある方にも推奨できる刊行物である。